

第5回環境大学・環境学習円卓会議(要旨) 報告書

【日 付】	平成24年2月14日(火)
【場 所】	全員協議会室 AB
【出 席 者】	《委員》 1 環不知火プランニング 吉永 利夫 2 相思社 遠藤 邦夫 3 水俣自然学校 三村 堅一 4 みなまた環境塾 濱田 裕史 5 市民公募 清水 晶夫 6 市民公募 井上 章久 7 環境モデル都市推進課 岩下 一弘 8 〃 坂本 愛 《有識者》 ・熊本大学 田中 昭雄 ・崇城大学 永松 俊雄 《オブザーバー》 ・国立水俣病総合研究センター 佐藤 克子 ・環境省 大倉 紀彰 ・環境省 富田 茉莉 《事務局》 ・水俣市企画課 川野・一期崎・坂本・竹下・千々岩 ・三菱総研 福田・多田
【資 料】	①水俣市高等教育・研究機関設置構想に関するアンケートから……資料1 ②第5回環境大学・環境学習円卓会議 今後の検討方針……資料2 ③第5回環境大学・環境学習円卓会議 セールスペーパーの構成(案)……資料3 ④「環境首都」水俣・芦北地域創造事業 事業スケジュール(案) ⑤これからの円卓会議存続のための仕組み作りについて

【内 容】

1 大学訪問について

① 1月30日(月) 東京都市大 宿谷教授

【企画課より報告】

- ・教授ご自身、大学院や学部を設置を担当。文科省の認可のハードルの高さを熟知。
- ・国立大学も成果主義が求められている。
- ・学生たちの顔も見える程度の小さな規模からスタートを。5年～20年かけて大きくした方がほがよい。

② 2月7日(火) 熊本大学 谷口学長

【企画課より報告】

- ・市長、副市長との会談結果について概要を報告。

【円卓会議での意見交換】

- ・熊本大学がコアになるには高いハードルがある、文部科学省が評価するもので無ければならないというイメージを受けた。
 - おそらく好意的というよりは若干引いていると考えられる。
- ・国立大学は簡単にはつぶせないが、もう少し国際的に意義のある研究をやるべきという要請は強い。水俣と組む場合に国際化の道が開ける可能性が示唆されるとよい。
 - 既に熊大は中国の 40 大学と連携している。水俣をきかつけきかけとして国際連携を進めていく道は簡単では無く、熊大にメリットを感じてもらうには工夫が必要。
- ・市として「コア大学」をどこにするのか(例えば熊本大学)という見定めをすべき。
 - 目標は連携大学院であるが、少しずつ実績をつくりながら進めていく。見定めは現時点ではできていない。拠点施設・拠点機能をつくり研究者に評価してもらうことが必要。

2 水俣市高等教育・研究機関構想に関するアンケートについて

【企画課より報告】

- ・アンケート結果の概要を報告。

【円卓会議での意見交換】

● 調査全体の印象

- ・回収数が少ないという印象である。
- ・水俣に訪問した経験を有する研究者等は水俣での取り組みを好意的に見ている。来た経験が無い研究者等人に来てもらう工夫が必要。
- ・アンケート結果から得られた課題を整理することにより短期・中期・長期の目標や役割分担もできるようになる。
- ・再訪希望者が居ることが可能性として分かったのは良かった。
- ・市としてどのような教育や研究が必要なのか提示することが必要との回答はそのとおりだと感じた。
- ・アンケート期間が短いと感じた。

● 関連資料の整理について

- ・水俣に来るとれば水俣関連の資料が一通り揃っていると助かる。
- ・誰がどのようなデータを保有しているのかが分かるだけでも良い。
- ・97年から国水研から相思社に委託してデータベースを整理しているが公開されていない。

- 国水研では関連資料を整備する方向で検討している。（紙ベースで資料が古い場合や、個人情報との関係で公開が難しい場合もあるため、中々進んでいない。）
- 水俣で一元的に入手できると水俣に行こうという意欲が高まる議論になる可能性はある。

● コーディネート機能について

- ・現実に相思社や KSP がコーディネートしているので、足りない部分があればそこを明確にして実施すれやればよい。

3 水俣市高等教育・研究機関構想に関するアンケートについて今後の検討方針について

【企画課より報告】

- ・今後の検討方針（案）について説明。

【円卓会議での意見交換】

■● アクションプランについて

- ・拠点施設の検討よりも先にまず取り組む施策を進めるべきではないか。
- ・施策例はすべて必要なのか、やるのかやらないのか、実績をつくりながら進めていくというのがこれまでの議論では。水俣でできるプラン（例えば宿泊施設等をパック化したプラン）を提示して、どこかのゼミをモデルケースとして水俣に誘致し、課題等を検証する方法もある。
- ・研修生には足が無い、食事処が無いといった問題がある、このような課題を洗い出すことも重要ではないか。
- ・事業が長期に続く場合はある程度のスパンで考えてよいが、どの程度なのか。
 - 事業自体はおそらく3年程度と想定される。
 - 水銀条約の時点がひとつの目標になる。
 - 水銀条約までにその後の決め手となる実績を作っておく必要はある。
- ・中身が円卓会議で議論しきれなかったので深めたい。
- ・施策例1は小林教授が大学の研究予算を確保したという話を伺っており、今後取り組んでいく各種施策の取ったので起爆剤になる可能性はある。
 - 地元が小林教授に会いに行き行って具体的に詰めていくことも重要である。
- 中国の国費留学制度（東大・京大・一橋大・早大・慶大）の活用などもアイデアとして考えられる。
- ・平成 24 年度は手分けをして行動に移す段階であり、プロジェクトを1つでも水俣に呼び込む。
- ・学会誘致を進める場合でも、例えば理事等に具体的な聞かないと学会の事情は分からない。人脈（ネットワーク）を作らなければアクションプランも実行に移せない。
- ・民間のコンベンション協会等に委託して学会を誘致する例もある。
- ・シンポジウムを東京でやるのもスピード感があって良い。→秋ではなく、4月にでも。
- ・平成 24 年度からギャランティも発生する事務局ができれば推進力は高まると思う。受け入れ体制というより地元事務局に機能を持たせるのも手である。
- ・水俣市民が「この頃雰囲気が変わった」と感じられることが大切。市民がその動きに気づくことが重要である。
 - 環境フェスタを活用して、円卓会議や市民の活動を重層的に進めていくということもある。
 - 環境フェスタの企画を1年間じっくりと練り上げていく。
- ・アクションプラン1・2（基本方針・大学との交渉）は期間が短い。

- ・施策例を進めてみないと1・2の内容の判断ができない。
- ・準備組織の立ち上げが遅い。担当を決めて役割分担をしないと具体的に進まない。
- ・準備組織は、他の業務を兼用して片手間でするのではなく、専属にはりつけて対応すべき。

●今後の予定

- ・今回の円卓会議での議論をアクションプランに取りまとめればよいのではないか反映していけば良いのではないかな。
- ・例えばゼミ合宿30件をつかまえるという目標を立てるのはどうか。
- ・アクションプラン2において、今回の資料に示されている各種施策の実現に向けた活動をアクションプランに取り込んでどうか。は可能である。
- ・民間のコンベンション協会等に委託して学会を誘致する例もある。
- ・中国の国費留学制度(東大・京大・一橋大・早大・慶大)の活用など。
- ・→施策例の実現方策の検討、実行をアクションプランに盛り込む。
→アクションプランの修正案に対してメールで意見を頂く。
→円卓会議メンバーは、自分がやれること、予算、施策アイデアを2月中にメールで事務局に提出する。

以上